

研究内容及び成果報告

【研究題目】

OPENイノベーションルームを活用した創造力・課題解決力を育む先進的・実践的な教育活動の研究

1 研究内容

【研究1】「総合的な探究の時間」の系統的教育内容の構築

○研究の背景

- ・近年、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、さらには、長引く新型コロナウイルス感染症による影響や混迷を増す世界情勢など、まさに予測困難な時代を迎えようとしている。
- ・このような時代にあって、子供が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。
- ・「総合的な探究の時間」は、探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすことになる。
- ・平成30年3月の学習指導要領の改訂においては、名称を「総合的な探究の時間」に変更し、小・中学校における総合的な学習の時間を基盤とした上で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統一的に働かせることに加えて、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら問いを見いだし探究することのできる力の育成が求められている。
- ・このような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものになること、つまり、探究が高度化し自律的に行われることが重要である。
- ・令和3年1月の中央教育審議会の答申では多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれずに各教科・科目等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創

造に結び付けていく資質・能力の育成が求められるとして、総合的な探究の時間における教科・科目等横断的な学習や探究のプロセスの充実を図ることが期待されている。

○「藤北S Tガイドブック」作成の趣旨

- ・本校の「総合的な探究の時間」を、生徒や先生から呼びやすい名称とするため「藤北S T」とし、藤北S Tを進めるうえでの基本的な考え方や指導計画、実践等を具体例も踏まえながらガイドブックとして取りまとめることとした。
- ・本校で「総合的な探究の時間」を担当する教員及び本校に転任となった教員が本教科を担当したときの道しるべになるよう、また、円滑に授業を進められるように作成した。

○本校の現状及び生徒の現状

- ・本校は、志太榛原地域にある公立の総合学科高等学校である。このため農工商普を専門にしている教員が揃い、農場をはじめ軽装備の工業施設も有し、加えて民間企業とのつながりもある。
- ・教育課程は、2年次から農工商普のコース(系列)に分かれるが、系列に縛られることなく選択できる授業も設定される。
- ・生徒の進路状況においては、近年では概ね半数の生徒が就職を希望し、およそ30%が各種専門学校、残り20%ほどが四年制大学および短期大学に進学希望を持っている。大学進学では、多くが総合型選抜および学校推薦型選抜で受験する。
- ・生徒は総合学科の特色の一つとして科目選択によって幅広い分野を学習することができる利点があり、実習授業を主とする科目には熱心に活動する一方で、小学校から中学校までをコロナ感染症の影響を受けた世代であり、課外活動や学校行事の多くを経験することができず、自己肯定感や自己有用感を味わう機会を十分に得られなかった生徒も少なくない。
- ・誰かのためになりたいという気持ちを持っている生徒が多く、授業や学校行事などの場で献身的に活動する生徒も増えている。

○藤北S Tの年次計画

- ・本校の教育課程における総合的な探究の時間は、1年次に週時程外(各学期の定期テスト時および各学期末の時間を利用)0.5単位、2年次に週時程外の0.5単位に加えて週時程の1単位、3年次に週時程の1単位が設定されている。
- ・藤北S Tは、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の過程(以下、探究の過程)を繰り返し、学習の質を高めていくことが学習指導要領で求められている。
- ・また、生徒の主体性を喚起することや進路の状況、上記の現状を踏まえた上で、以下のように藤枝S Tを企画した。

(1年次) 藤北STのガイダンス(概要説明)を行った後、授業担当者から出されたテーマをもとに探究の過程を行い、物事を深く知れば知るほど、課題が発見できることを体感できることを目的として学習する。

(2年次) 自分の興味・関心がある分野で大別し、さらに興味・関心が近い同士でグループを組み、探究の過程を行う。ここでは、自身の在り方・生き方を踏まえて自ら課題を設定し、それを解決することを通じて多様な考え方や特徴をもつ人がおり、それらが協働しながら社会をつくっていることを理解することを目的とした。

(3年次) 自身を見つめ、自分と社会とのつながりを知ることで、自分の強みや特徴を見出し、それを生かして、自身の周囲の人や社会を少しでも幸せに(貢献)する決意を持たせ、自己肯定感や自己有用感を上げることを目的とした。

○3年間を見通した指導構想

学年	1年	2年	3年
目標 (全学年)	探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方や生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成する。		
目標 (学年)	<ul style="list-style-type: none"> 調べ学習を通じて、自己の興味・関心を広げる。 テーマについて調べることで新たな疑問や問いを発見できることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の興味・関心から得た課題を解決する活動を通して、多様な考えや特徴を持つ様々な人によって社会が成り立っていることを理解する。 歴史・文化及び科学技術が現代社会や人間に及ぼす影響を科学的根拠に基づいて考察し、自分が他者や社会に貢献しようとする行動できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の興味・関心における課題を解決する方法(理想の自分像)をもとに、人や社会を少しでも幸せにする自己の在り方・生き方を探究できるようになる。
概要	探究の過程(課題発見(設定))、情報収集、整理・分析、まとめ・表現)を行っていく上で必要な手法を学習する。	自分の興味・関心から見出した課題に対して、探究の過程を用いて解決する。	自己を多角的に見つめ、自分の良さを生かしつつ、人や社会を少しでも幸せにする自己の在り方生き方を模索し、表現する。

※上記は、本校の生徒育成方針である、①社会とつながる力、②コミュニケーション力、③努力を続ける力、④思考力・判断力・表現力、⑤創造する力、⑥協働する力 を関連

付けた目的とした。

【研究2】指導者のファシリテーションスキルの向上

本校の「総合的な探究の時間」や「課題研究」などでは、生徒の興味・関心を尊重しつつ、例えば、グループで興味のあるテーマについてさらに調査したり、違うアプローチがないかなどを提案・発表したりと、他者の評価を受けながら学習を深めていく。その学習過程において、教員がどのような点に留意してアドバイスをすれば効果的かなど、専門家等を講師とした研修を先生が受け、知識や手法を学ぶ機会が必要であると考えた。

○指導主事を講師とした研修会の開催

7月中旬に、総合教育センター総合支援部高等学校支援課の指導主事を招聘し、「総合的な探究の時間の充実」と題して研修を実施した。

【目的1】

年間指導計画を確認し、3年間を見通した「総合的な探究の時間」の目標や内容について共通理解を図る。

中学校段階の「総合的な学習の時間」では、生徒自身が課題を発見することの有無は言及されていないが、高校段階の「総合的な探究の時間」では、自分の在り方について考えを巡らせながら自ら課題を発見することが明記され、より主体性を持って学習するものであることを共通理解する必要がある。

【目的2】

「総合的な探究の時間」における生徒への助言等のノウハウを学び、ファシリテーション力の向上につなげる。

目前に生徒がいることを思い浮かべながら、先生方が問いを考え、「教え込む」ことから「引き出す」ことへの転換が求められる。また、単元構想や生徒との関わり方について、教職員間で共有を図ることも必要である。

○先進地の視察等（総合学科全国大会 高知県）10月31日、11月1日に2名参加

視点①

年間指導計画のバージョンアップの提案や生徒に対しての掘り下げる「問い」について、他校において有効な研修を実践しているなどの取組があればその内容等

視点②

初めて総合学科に転勤した先生方に自校の総合学科の特色や系列の考え方、教育課程の概要などを盛り込んだ教職員用のガイドブック的なものを作成している学校があればその内容等

視点③

生徒と外部講師等の学び合いがしやすい学習環境を整備し、学びの循環が創出されるような工夫、教育環境の整備、外部人材を活用し定期的に生徒とディスカッションさせているといった取組があればその内容等

(視察報告)

- ・ 1年生から3年生までの系統的な学びは、1年生では「産業社会と人間」で自己理解、職業研究、学問研究、ライフプラン、志望理由書などをテーマに取り組み、2年生では「総合的な探究の時間」において職業探究、言語探究、進路探究に取り組む。その積み重ねの上で3年生では10講座に分かれて探究を行うとのことであり、系統的な仕組みが際立っていた。
- ・ 事例発表した高校は、地域密着型の総合学科という立ち位置で、その魅力を少ない教職員・生徒でも実施、展開できるという魅力ある系列や教育課程を構築した実践発表であった。一方で、新たな手法に挑戦しつつも、やはり継続性が課題であるとのことであり、本校の今後の教育課程の方向性を考える貴重な機会となった。

○外部評価者（アドバイザー）による指導助言

本校の「総合的な探究の時間」（1，2年生）の授業参観から、生徒の実状をふまえた次年度以降の「総合的な探究の時間」の指導計画等について指導・助言を受ける。この指導助言にはキャリアコンサルタントとしての知見を踏まえた生徒への声掛けのあり方といった点も含め、指導手法をとりまとめ、次年度に活かす。

(指導助言の内容) ※全体評価から授業に係る内容部分を抜粋

『2年生の「中間発表の追加修正の時間」に、教室をまわりながら生徒に質問を投げかけてみました。宇宙食をテーマに探究しているチームには、「宇宙食、今と昔では違うの?」と尋ねると、生徒は「ものすごく違うんです。見てください」と言って、違いの要点をスライドで簡潔に説明してくれました。説明内容はもとより、自信をもった言葉が力強く、そのエネルギーが波のように伝わってきました。他のグループでは、友達からのアドバイスの用紙を見ながら、「伝わったのに、評価が良くなかった。なぜ伝わっていないのか、その理由をもっと知りたい」など、改善を視野に入れた言葉が、飛び交っていました。

「総合的な探究の時間」のカリキュラム作成と運用という営みは、生徒が他者との繋がりの中で自分軸を作るときに、生徒が安心して立ち向かえる環境づくりでもあると感

じました。時代の動きが早い今、生徒が自身の発表を、他者の視点を取り入れながら修正、工夫、改善していくように、学びの環境が、発展していくことを願っています。』

【研究3】OPENイノベーションルームの活用効果

イノベーションルームを新設し、授業等に活用することにより、生徒と先生のディスカッション、生徒同士の小グループでの話し合いや学び合いの場となり、さらに創造力を育み、新しい発想を生み出す教育環境となり得るかについて検証を行う。

○活用例



○イノベーションルームで授業を行った教員からの感想

【活用のメリット】

- ・個別最適化学習の学習チームとして、各班の進度に応じて、ホワイトボードを利用しながら活用（教師は各班の状況を把握し、支援にあたるなど演習授業向きである。）
- ・ある程度理解力のある生徒と理解が不十分な生徒をグループにすると、相互の教え合いによってホワイトボードを活用しながら進めることができる。
- ・個別対応に近い形になるので一斉授業では流されてしまう個別の問題に対応しやすい。
- ・あえて、分かりにくいところを全体に投げかけて、意見をホワイトボードに書かせれば、各グループで考えたことを共有しやすい。

【活用のデメリット】

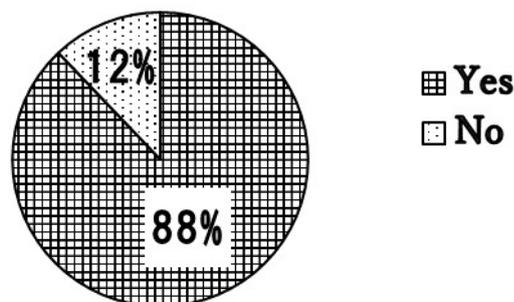
- ・グループワークの苦手な生徒や生徒の人間関係が円滑でないと、ただの自習学習になってしまう。
- ・わかっている生徒が発言内容に自信がないと、グループワークが機能しないことが懸念される。
- ・わからないことを共有、主張しあえるクラスづくりをしないと、うまく活用できない可能性がある。
- ・生徒のレベルに合わせた問題を設定しないと目的から逸れた会話が生じてしまう。

2 研究の成果

【研究1】総合的な探究の時間の系統的教育内容の構築

○振り返りアンケート結果（生徒対象）

Q 1 興味・関心ごとに分かれて探究課題を設定し、実際探究活動をしてみて楽しかったですか。



Q 2 Q 1で答えた理由を具体的に記入してください(抜粋)。

(YES)

- ・ 交流の幅が広がったし仲も深まった。
- ・ 興味をもったことを深く学んでいくことが楽しかった。
- ・ 進路活動に役立てられると思った。
- ・ 自分たちの力で取り組んだので、うまくいかないこともよい学びの時間であった。
- ・ みんなで(教授の話聞きに)大学に行って楽しかった。
- ・ 課題設定からまとめまで自分たちで話し合いながらやったので、達成感があった。
- ・ 探究課題をみんなが真剣に取り組み、フォローしあってできた。

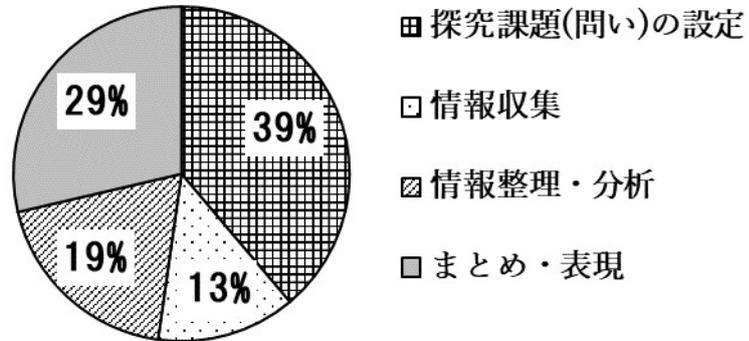
(NO)

- ・ ペアを組んだ人と最初からテーマが違い、満足の行く課題設定ができなかった。
- ・ 私達のグループでは、探究課題を決めることが難しかった。
- ・ 決めた探究課題が難しかった。

Q 3 今回、話したことがない(少ない)生徒とグループを組んで探究活動を行いました
が、どのように感じましたか？(抜粋)

- ・ みんなで同じことに取り組んで仲が深まった。
- ・ 自分に欠けていたところを補ってくれた。
- ・ 協力して作業を分担したり、コミュニケーションを取ったりすることができた。
- ・ 考えていることが違うので色々な方向から考えたり、調べたりすることができた。
- ・ これを機に話したことがない人と活動することに挑戦してみるべきだと思った。
- ・ 最初は気を遣ったが共同作業をしていけば自然と仲良くなることが分かった。
- ・ その人の知らない一面を知ることができ、交友関係が広がった。
- ・ 元々仲がよいグループだったが、その分誰かに甘えてしまうことがあった。
- ・ 話をしたことがない人たちだったのであまり会話ができなかったのが残念だった。
- ・ あまり意見を出し合えなくて、思うように進まなかった。

Q 4 探究課題を設定、プレゼンテーションするまでの過程(探究の過程)で、どこが一番難しかったですか。



二。

(情報収集)

- ・欲しい情報について見つけることができなかつたり難しい説明だつたりした。
- ・問いを解決するためどのようなアンケートをとつた方がよいか難しかった。
- ・正しい情報か見極めるのが大変だつた。

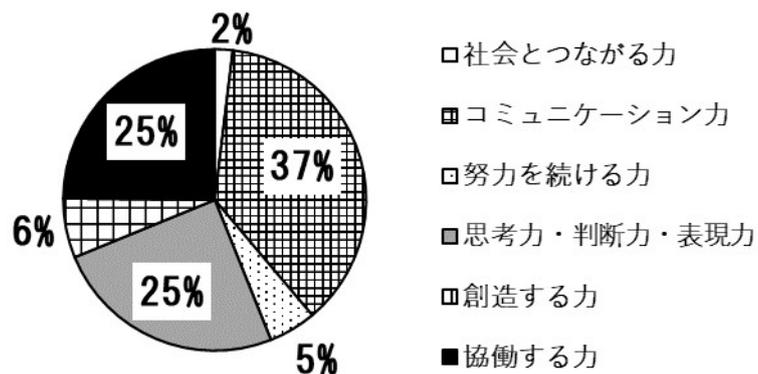
(整理・分析)

- ・情報をどう分析してまとめるかまとめ方など苦労した。
- ・何が言いたいのか分からない結論になつてしまった。
- ・必要な情報を取り出し、比較し、独自の考えに導くことが難しかった。

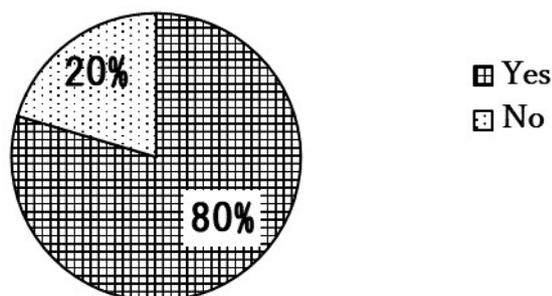
(まとめ・表現)

- ・スライドを作つていくうちに元のテーマから内容がそれてしまった。
- ・どのようにスライドをつくれれば見やすく、理解しやすくなるのか。
- ・伝えたいことを時間内にまとめるところが大変だつた。

Q 6 あなたは総合的な探究の時間を受けて、どのような力が身に付きましたか? もつとも力がついたものを以下の選択肢から選んでください。



Q7 あなたは総合的な探究の時間で、課題(テーマ)について探究を進めていく中で、新たな疑問を発見することができましたか？



○アンケート結果の検証（総括担当教諭による）

生徒アンケートの結果から、多くの生徒が興味・関心分野の探究学習に楽しさを感じたようである(Q1)。興味・関心ごとについて探究することで学びに対する主体性の向上を目指しこのような探究プログラムを設定したため、ねらい通りの結果となった。また、グループでの探究学習で、必ずしも親しい間柄ではない生徒同士が組んで行ったが、それについても多くの生徒が肯定的な意見を寄せており(Q3)、共通な課題に対して協力し合うことで連帯感を抱く生徒もいた。実社会では、親しい間柄でチームを組んで仕事を行うことはほとんどなく、任意のチームで共通課題を解決していく場面が多い。現状で本校の生徒の半数は卒業後、就職を選択するため、このようなグループ設定にしたが、肯定的な意見が多かったことは喜ばしい限りであった。探究の過程では、課題の設定に難しさを感じていたことが明らかになった(Q4)。課題の設定については、担当した教員からも指導する難しさの訴えが多数あり、苦慮する状況が伺われた。また、まとめ・表現に難しさを感じている生徒も多かった(Q4)。情報の整理・分析から解決法や独自の結論を得ても、それをどのように他者に分かりやすく伝えればよいかの手法に苦戦していたようである。藤北STでは、その目標を本校の生徒育成方針(グラデュエーション・ポリシー)で示されている6つの力の育成に設定しているが、探究活動を通じてどの力が一番身に付いたかというアンケートには、コミュニケーション力および協働する力を挙げた生徒が多かった(Q6)。前述したように、必ずしも親しい間柄ではない生徒同士が組み、お互いに困難を共有して、克服を目指した体験がこのような結果を導いたことが示唆された。また、課題解決

を目指しているうちにさらなる課題を見出した生徒もおよそ 80%いたことも今後の指導の励みとなった。

2年生の藤北 ST のプログラムを終えた後の課題として、以下の点を挙げたい。1つ目は、担当者側の成熟度を高めていくことである。総合的な探究の時間が本格導入されて間もない現在、いまだに探究学習とは何者で、どのように指導してよいかわからないという意見を多数頂戴した。総合的な探究の時間の担当者は、ファシリテーター役に徹することが求められているが、経験不足から生徒の探究学習にどう寄り添っていけばよいか難しかったようである。しかしながら今回の学習指導要領改訂では、総合的な探究の時間以外に「探究」と名のつく科目が複数設定されており、各教科においてもそれらの見方、考え方をもとに探究学習を行っていくことが推奨されている。したがって、我々教員側も探究学習に適する指導方法の習得が求められる。2つ目は、探究の過程、それぞれで、生徒がステップアップしていけるような教材を充実させていくことである。特に生徒、教員共に苦戦していた課題の設定に関しては、課題や仮説の違いやそれらの設定ができるように導くことができる教材を用意することが急務であることが分かった。また、収集した情報をどのようにまとめ、どのように論理構成していくかの手法なども学習する必要があることも分かった。3つ目は、総合的な探究の時間と各教科間のつながりを持たせることである。双方で探究の手法を使い、生かし合うことで、探究の質を高めることができるはずである。これらの課題を解決するために今後、教員対象の探究に関する研修や教材の充実、各教科との連携を強化していき、この藤北 ST という探究プログラムをさらに発展させていく必要がある。

【研究2】指導者のファシリテーションスキルの向上

○事前研修

職員会議の時間に、職員研修の予備知識として学習指導要領における「総合的な探究の時間」の目標や内容について共通理解を図った。

(目的1)

シラバス（年間指導計画）を確認し、3年間お見通した「総合的な探究の時間」の目標や内容について共通理解を図る。

(意図)

他校（他県含む）の実践や指導主事からの提案・助言等を踏まえた評価から、必要

に応じて次年度に向けたバージョンアップも視野に入れる。一方で、これまでの取組から先生方が負担となっていた点について、少しでも軽減できる方法も模索したい。

（目的2）

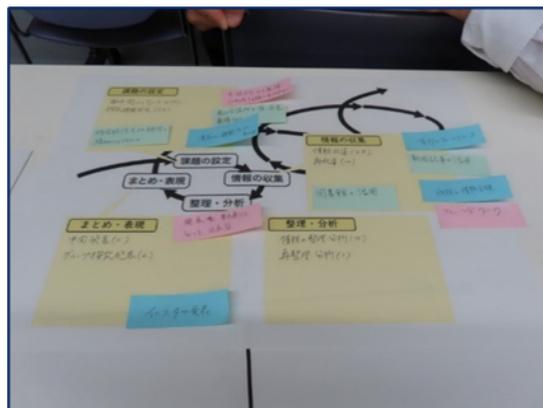
「総合的な探究の時間」における生徒への助言等のノウハウを学ぶことで教員のファシリテーション力の向上につなげる。

（意図）

中学校段階の「総合的な学習の時間」の目的は「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」である。高等学校段階の「総合的な探究の時間」の目的は、「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とある。中学校の「よりよく課題を解決する」から、「よりよく課題を発見する」ことが高校段階に加えられていることを念頭に置き指導に当たっていく必要がある。

○職員研修

静岡県総合教育センター総合支援部高等学校支援課の指導主事を講師として「総合的な探究の時間の充実」と題して研修を実施した。2つのテーマについてグループワークを行った成果を先生方にフィードバックすることで理解を深めることができた。

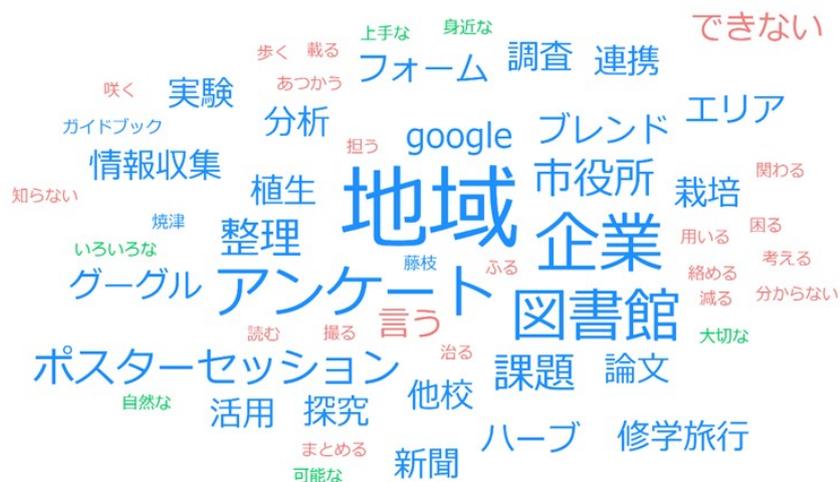


【グループワークテーマ1】年間指導計画のアイデアを挙げてみよう

(先生方からのアイデア)

- ・ 演劇にしてみる (まとめ・表現 / 1 班)
- ・ インスタで発表する、他校と情報交換 (まとめ・表現 / 2 班)
- ・ C-learning でグラフ化する (整理・分析 / 3 班)
- ・ 身近な人の「困ったこと」を集める (課題の設定 / 4 班)
- ・ 情報カードを作って整理する (整理・分析 / 5 班)
- ・ 自分史を作成する (課題の設定 / 6 班)
- ・ 一度大きな失敗をする (課題の設定 / 7 班)
- ・ 地域の人から情報収集させたい (情報の収集 / 8 班)
- ・ 再課題設定で、必ず探究の過程を 2～3 周する (課題の設定 / 9 班)
- ・ 電子ブレインストーミング (整理・分析 / 10 班)
- ・ 1 番言われたい (言われたくない) 言葉アンケート (整理・分析 / 11 班)
- ・ 実験をしたい! (情報の収集 / 12 班)

(テキストマイニングの結果 (出現頻度))



【グループワークテーマ2】掘り下げる「問い」を考えよう。

○課題設定の場面である生徒が探究の相談に来たという想定

私は、海が好きなので、海に関する探究をしたいと思っています。今日はテーマを決める日だったんですけど、何をテーマにしたらいいのかがよくわかりません。とりあえず、今考えているのは、海辺でおしゃれなカフェをやりたいということです。尹弁のも考えてカフェにたくさんの人を読んで、それがSNSでバズって有名になったら、地域がにぎわっていいと思います。

○アドバイザーからの評価 ※【研究1】の評価を含む

『人生100年時代、私たちの未来は、時間的に長くなっているだけでなく、多様に描けるようになってきました。学校案内にある「自分の未来を切り拓け!」のフレーズそのものです。そのためには、「自己選択」「自己決定」が鍵となるでしょう。

生徒は、家族や学校という社会の中で、時には大人に支えられながら、人との関わり方を学び、チームや仲間との関係を築いてきました。その一方で、人との関わりはもちろん大切ですが、自分は自分らしくいたいという自分軸を抱くようになります。そのため、周りとの繋がりを重視するために自分を出せない、自分を主張しすぎて他の人との人間関係を構築できないことなど、不安定な感情が顔を出すこともあります。

家族、学校、そして社会というシステムの中で、自分を維持しながら他の人との繋がりも大事にし、両方をバランスよく保てることは、感情が安定しメンタルヘルスを保つ上で一つの要素ともいえます。高校生という時期に、一見矛盾しているように見える「繋がり」と「自分軸」の両方を視野に入れ、生徒が「自己選択」「自己決定」を継続的に体験するには、どうしたらいいのか、それは、教育に携わる多くの関係者の課題でもあります。

藤枝北高等学校では、総合学科という特徴を活かしながら、さらに、「総合的な探究の時間」において、生徒自身が興味関心のあるテーマを選び（自分軸）、友達との対話を重ねながら（繋がり）探究を進めていくカリキュラムを構築しました。それが、「自分の未来を切り拓く」ための大事な時間である「藤北ST」であり、このカリキュラム構築において重視した点を整理しまとめたものが「藤北STガイドブック」です。

前提として、「総合的な探究の時間」には、教科書がありません。全教員が取り組み、生徒が見通しをもつためには、シラバスが必要です。3年間を見通した学年ごとのシラバスには、月毎の学習計画、到達目標などがA4 1枚で示されています。教員も生徒も一覧してゴールをイメージすることができます。

その上で、まず、学年ごとに、詳細な指導計画（日程）が組まれています。各学年の教員（学年ごとの全HR担任及び副担任）は、どの時間をどのように使うのか、その時間で何をするのかを把握できます。この計画は、同時に生徒にも伝えられ、どのようにしてゴールまで辿り着くのかを描くこともできます。

次に、生徒の発達段階を視野に入れた探究の仕方の検討がされています。例えば、1年生は、中学での学びに差があることを前提に、探究の4つの過程を通してアウトプットすることや、各過程におけるスキルの再確認など、探究という土俵に乗るための基礎基本を学ぶことを重視しています。2年生は、自分の興味関心に沿ったテーマの選択、似たテーマをもったグループでの対話的な学び、他者の意見を取り入れて修正するなど、自分軸を

重視しながら友達からの新たな視点に立ち工夫改善していく過程を重視しています。3年生は、自分自身に軸を置き、個人で探究を進めます。自分の興味関心をもとに、自分を多様な視点で振り返り、自分の今の連続である未来を描きながら、現在の自分と「なりたい姿」を比較し、今、そしてこれから何をしていきたいのかを見つけ、アウトプットは自分の言葉で伝える（話す）時間を設けています。

さらに、「総合的な探究の時間」に取り組んだ経験の浅い教員もいることから、このカリキュラムを教員同士が共有できるように、外部講師（総合教育センター）による研修の機会を設けています。グループワークを行うことを通して、この時間の目標、意味などを実感するとともに、探究の各過程におけるスキルを習得したり、生徒との関わり方を学んだりすることができます。何より、「総合的な探究の時間」での学びの中に、教員自身が担当している専門科目と重なっている点があることに気づくことで、生徒も高等学校での学びを横断的に総合的に捉えることができると考えます。

教科書がないことから「総合的な探究の時間」は、生徒の実態に沿ったカリキュラムを作成できるというメリットがあります。その反面、教員間の共有が難しいというデメリットも出てきます。長所を最大限に生かしつつ、短所を補うために、「藤北 ST ガイドブック」は作成されました。

時代の動きが早い今、生徒が自身の発表を、他者の視点を取り入れながら修正、工夫、改善していくように、学びの環境が、この「藤北 ST ガイドブック」をベースとして、発展していくことを願っています。』

【外部評価アドバイザー】

塩谷 京子(しおやきょうこ)

- ・ 関西大学総合情報学研究科博士課程修了 博士（情報学）
- ・ 国家資格キャリアコンサルタント、放送大学客員准教授、昭和女子大学非常勤講師
- ・ 静岡県公立小学校教諭、関西大学初等部／中高等部専任教諭を経て現職

【研究3】OPENイノベーションルームの活用効果

教職員アンケートから（対象：32人）

- | | | | |
|---|-------------------------|-----|---------|
| A | イノベーションルームを授業等で活用した | 17人 | (53.1%) |
| B | イノベーションルームを授業等で活用したい | 10人 | (31.3%) |
| C | イノベーションルームを特に使いたいとは思わない | 5人 | (15.6%) |

□「A イノベーションルームを授業等で活用した」と回答した先生

Q グループワークやペアワークを取り入れた回数

- | | | |
|-----------|----|---------|
| ・ 0回 | 8人 | (47.1%) |
| ・ 1回 | 3人 | (17.6%) |
| ・ 2回以上 | 4人 | (23.5%) |
| ・ 単元に1回程度 | 1人 | (5.9%) |
| ・ 毎回 | 1人 | (5.9%) |

Q 活用してよかった点

- | | | |
|---------------------------------|----|---------|
| ・ 机や椅子の移動がしやすくグループワークがしやすかった。 | 8人 | (25.0%) |
| ・ 基本グループワークで授業を進めるので活動しやすかった。 | 1人 | (3.1%) |
| ・ 次年度はこの教室を使い、生徒の対話的な学びの場を持ちたい。 | 7名 | (21.9%) |
| ・ 無回答 | 5名 | (15.6%) |

Q 改善が必要と思われる点

- | | | |
|-------------------------------|----|---------|
| ・ 既存の机よりも大きいため、机は少ない方が活動しやすい。 | 7名 | (21.9%) |
| ・ ホワイトボードの数はもう少し多い方がよい。 | 5名 | (15.6%) |
| ・ 無回答 | 8名 | (25.0%) |

Q イノベーションルームを使用した生徒の感想

- ・ 机が違うので雰囲気がいつもと違ってやる気が出る。
- ・ 天板が白いので明るい雰囲気になるすごいことをやっているような気持ちになった。
- ・ 黒板の板書をノートに書くより活動があることで理解が深まり、自由記述の問題に自分の意見をたくさん書くことができた。
- ・ キャスター付きで動かしやすいが、ストッパーをしないと机が動いてしまうときがあった。

Q 効果が期待できる活用方法についてあげてください。

- ・少人数のゼミ形式で進めていけるような集団の際に利用する。
- ・最初から机が円卓上になっていると使いやすい。前を向いている配置であると普通教室のように使ってしまう。
- ・はじめから4～6人のグループワークができる配置にしてあれば教職員生徒ともグループワーク等に活用するための教室という印象が付きやすいのではないか。
- ・

□「B イノベーションルームを授業等で活用したい」と答えた先生

Q どのような場面で使いたいと思いますか。

- ・発表やプレゼンテーションに特化した授業展開の場面
- ・外部講師を招聘しての研修や講義
- ・教科書やノートを持ち込まず、対話や発表に集中させる場面

○総括

今回2つの部屋をイノベーションルームとするため、従前の机や椅子から新たに機能的な机、椅子、ホワイトボードを導入する計画を掲げ、6月、10月にわたり順次整備することとなった。年度途中で教室の雰囲気の変化し、とまどった生徒、先生もあったと考えられるが、そのような中でもこの部屋の機能をよく理解し、グループワークや生徒同士で考えさせる場면을積極的に取り入れたことで生徒の理解が深まり、自由記述の問題などに意見をたくさん書く生徒が多くなったという成果が表れたことは有意義であった。

授業者からの提案からは、はじめから4～6人のグループワークができる配置にしてあれば生徒、先生にもこの部屋はグループワーク等に活用するための部屋だという印象が付き、それを前提とした授業にチャレンジしていくといった効果もあるのではないかと推察する。

今回のアンケート結果から、イノベーションルームを授業等で活用した又は活用したいと考えている教員が、全体の84.4%であったことから、イノベーションルームを最大限に活用できる令和7年度の環境下において、生徒の対話的な学びの場面を意図的に取り入れた授業展開が増えることを期待したい。